

# アメリカ先住民ワンパノアグと土地問題 －1960・70年代を中心に－

The Wampanoag Indians and their Land Issues in the 1960s and 70s

藤崎 葉子  
FUJISAKI, Yoko

## 摘要

According to the Thanksgiving myth, Wampanoag Indians in New England welcomed pilgrims in 1620, taught them how to hunt, fish and farm and celebrated the first Thanksgiving with them in 1621. However, after fighting against the colonies in King Philip's War (1675-1676), many were killed and sold to the West Indies as slaves. Only Christian Wampanoag survived and his descendants have continued to live on Cape Cod in Massachusetts. During the 1960s and 70s, Native Americans fought for their rights along with other ethnic minorities in the US. With land development and housing construction, many white settlers and tourists came into contact with the Mashpee Wampanoag community. As a result, the Mashpee gradually lost their self-government, traditional customs of hunting and fishing and access to their sacred sites. On Thanksgiving Day in 1970, Wamsutta Frank B. James, a young Wampanoag, began to hold the National Day of Mourning at Plymouth to protest against the historical and present conditions of the Wampanoag. The Mashpee Wampanoag established their tribal council in 1974, reclaimed federal recognition and filed a suit for their land in 1976 based on the Indian Trade and Intercourse Act of 1790. This Act banned the transfer of native land without permission by the federal government. The Mashpee needed their land in the interests of sovereignty, traditional culture and tribal identity. They tried to reclaim their land based on their historical memories as the Wampanoag. Federal recognition was also necessary to gain federal grants for health, education and housing and to let non-natives know of the Mashpee's existence as a tribe. However, the court rejected the Mashpee's claim on the grounds that they had not existed as a tribe since the nineteenth century. After three decades, in 2007, the Mashpee became one of the two federally recognized Wampanoag tribes. This research focuses on the Mashpee Wampanoag in the 1960s and 70s, because it was an important period in their pursuit of their land and sovereignty.

キーワード：アメリカ先住民史、ワンパノアグ、土地権請求、連邦承認

Key word: Native American history, Wampanoag, land claim, federal recognition

## はじめに

1960・70年代のアメリカでは、他のエスニック・マイノリティとともに先住民の権利運動が高まった。マサチューセッツ州ケープコッド(Cape Cod)のアルゴンキン語族の先住民ワンパノアグ<sup>(1)</sup>(Wampanoag)もそのような運動を起こした部族の一つである。ワンパノアグは、かつてピルグリム・ファーザーズに狩漁や農耕を教えた先住民として感謝祭でよく取り上げられてきた。しかし、1675-76年のフィリップ王戦争(King Philip's War)で植民地軍に敗北し、4割以上の部族民が殺されて多くの男性が奴隷として西インド諸島へ売られた。キリスト教徒として反乱に参加しなかった少数のワンパノアグは生き残り、その末裔が長らく未承認部族としてケープコッドで暮らしてきた。合衆国を構成する最初の13州内で、先住民は歴史的に連邦ではなく州の管轄下に置かれてきたが、1970年代にはワンパノアグを含む東部の先住民部族が連邦承認と土地権を求めるようになった。そしてワンパノアグの支族の一つであるマシュピーーは、1976年に地元の土地権をめぐる、大手の土地開発業者であるニューシベリー社と100人以上から成るマシュピーー町の非先住民の土地所有者を相手に訴訟を起こした<sup>(2)</sup>。

ワンパノアグについては1970年代以降、歴史学や文化人類学、法学などの分野で研究が行われてきた。現代のワンパノアグに関する先行研究として主に以下の文献がある。歴史家フランシス・G・ハッチンズ(1979)は、マシュピーーの植民地時代から現代までの通史を文献史料によって概観している<sup>(3)</sup>。ハッチンズは上記のマシュピーーの土地権をめぐる裁判で専門家証人として、マシュピーーが1666年から1976年までの間、まとまりのある先住民部族として存在してこなかったと証言した。その後、ニューヨーク・タイムズ紙の記者ポール・ブロデュアー(1985)が19世紀末から1980年代までのマシュピーーの変容と発展を他のニューイングランドの部族と比較し、1970年代に裁判を起こした経緯を論じた<sup>(4)</sup>。

また、文化人類学者のジェイムズ・クリフォード(1988)は、マシュピーー族対ニューシベリー社等の裁判を傍聴して裁判記録を検討し、白人の文化観に基づいて裁判が行われたことを指摘した。マシュピーーの証言を分析した結果、1978年のボストン連邦裁判所の評決がマシュピーーの過去と現在の姿を十分に考慮しなかったと批判した<sup>(5)</sup>。一方、ジェラルド・トレスとキャサリン・ミルン(1990)もこの裁判では、マシュピーーが部族として不変に存続してきたかが問われ、進化し変容してきた側面が無視されたと論じた<sup>(6)</sup>。先住民部族のアイデンティティと自己決定権は尊重されるべきとして、マシュピーー族対ニューシベリー社等裁判の限界を指摘したのである。

人類学者のジャック・キャンピシ(1993)は、土地権をめぐる裁判でマシュピーーの弁護側の研究者として証言した研究者である。現地調査と文献史料に基づいて、マシュピーーの植民地時代から現代までの歴史とマシュピーー族対ニューシベリー社等裁判を分析した<sup>(7)</sup>。キャンピシはマシュピーーが歴史を通じて部族と伝統を維持しようと努め、そのために土地の権利承認を求めた

ことを明らかにした。

法学者のジョー・カリロ(1995)も、マシュピーは伝統的な政治組織を維持してきたとしてマシュピー族対ニューシベリー社等裁判を批判している。次第に部族の土地を失ったとしても、マシュピーは歴史を通して自治を維持しようとしたため、領土・司法において主流集団とは異なる固有の権利を有し、部族承認の請求を無効とされるべきではないと指摘した<sup>(8)</sup>。ジェイムズ・セドリック・ウッズ(2006)は、マシヤンタケット・ピークオット(Mashantucket Pequot)と比較しつつマシュピーの部族政治の歴史を検討し、文献史料や両部族へのインタビューを用いて、マシュピーの政治組織の変化と継承について論じた<sup>(9)</sup>。さらにマシュピーに関する最近の論文では、エリカ・クリスティン・ダンドレア(2019)が文献史料に基づいて、裁判所やマシュピー町、観光業に今なお残る白人入植者の論理を見出している<sup>(10)</sup>。

以上のように、ワンパノアグに関する研究は、1970年代のマシュピー族対ニューシベリー社等裁判を契機として、マシュピーの伝統の歴史の変遷を検討し、裁判のあり方を検証してきた。とくにマシュピーの歴史と現在を論じたキャンピシの著作は今日も代表的な研究であり続けている。しかし、いずれの研究でもマシュピーが1970年代になぜ、どのようにして土地権と連邦承認を求めたのか、また裁判でなぜそれらが認められなかったのかについて、十分に検討されていない。

本稿では、以上の先行研究を踏まえて、1960・70年代のワンパノアグが土地権と連邦承認を求めた背景と理由をマシュピーに焦点をあてて、主に文献史料を用いて考察する。とくに部族の土地に対するマシュピーの主張とその歴史観に注目しつつ、1970年代後半の裁判でその請求が認められなかった原因と当時の先住民政策との関係を検討したい。1960・70年代について考察する理由は、この時期に白人が多くマシュピー町に移住して彼らを取り巻く環境が激変したからである。また当時、レッド・パワー運動が高まって連邦政府は先住民の権利に関する各法律を制定したが<sup>(11)</sup>、マシュピーの場合は訴えが認められなかった。この理由を探ることによって当時のマシュピーの立場を明らかにしたい。さらに、1978年には内務省インディアン局(Bureau of Indian Affairs: BIA)が連邦承認の規定を公布し、それが後の2007年にマシュピーが連邦承認を受けの一因となった。史料として、当時の新聞・雑誌記事や連邦議会の公聴会記録のほか、判決文や法律、回顧録等を分析対象とする。マシュピーに注目する理由は、ワンパノアグの中でゲイヘッドと共にこれまで連邦承認を受けており、ボストンに近い本土に住んでいて非先住民の移住の影響が大きかったからである。

## 1. 土地開発と「喪の日」(National Day of Mourning)

本節では、まず1960・70年代のマシュピー町の様子を考察し、どのようにワンパノアグの共同体が変化したのかを明らかにする。マシュピーはケープコッドのマシュピー池の南に位置す

る町にずっと暮らし、20世紀半ばまでに消失したり、変容した伝統があっても、基本的に自治や伝統文化、部族のアイデンティティを維持していた<sup>(12)</sup>。1934年までに、マシュピーの86%の土地が666人の非先住民の所有となっていたが、これらの所有者はほとんど地元に住居していなかったため、マシュピーの自治はあまり影響を受けなかったのである<sup>(13)</sup>。マシュピーでは伝統的に族長やメディスンマン（宗教的指導者）が部族をまとめてきた。族長は部族員の同意によって決められ、部族の団結を強め、解決策を議論し、若者に部族の歴史と文化を伝承した。族長の決定では、女系の家長が部族に適正を提言し、前任者が家族と相談して候補者を選び、全ての家族の間で候補者が一人になるまで検討された。族長は通常終身であったが、部族が不適と判断したときには新しい族長が選ばれ、この方法は今日も続いている。また高位メディスンマンは会合での祈祷、結婚式や葬式など各儀式を執り行い、人々の相談にのりながら、ワンパノアグの文化を伝えてきた<sup>(14)</sup>。

1928年には部族全体の組織として、ケープコッドの全支族から成る「ワンパノアグ・ネイション(Wampanoag Nation)」が創設され、翌年、ポカセット(Pocasset)のリロイ・ペリー(Leroy Perry)が族長として高位セイチャム(supreme sachem)に選ばれた。またマシュピーとマーサズヴィニヤード島のゲイヘッドは親戚関係でつながり、よく集って交流した。ワンパノアグ・ネイションの族長はエルズワース・オークリー(Ellsworth Oakley, “Drifting Goose”)が1948年まで務め、アール・ミルズ・Sr.(Earl ‘Flying Eagle’ Mills, Sr.)が後を継いだ<sup>(15)</sup>。

ミルズはマシュピーの貴重な史跡であるオールド・インディアン教会を再建し、1967年に改修が完了した。マシュピー・バプティスト教会のメンバーはほぼ部族員であったが、礼拝に参加する者は少なかった。帰郷祝い(homecomings)がコミュニティ最大のパウワウ<sup>(16)</sup>になり、部族のアイスクリームの集いにより多くの部族員が集まった。また漁業や狩猟は伝統の一部であり、12月の鹿猟の季節や春のマス漁が始まるとマシュピーの人々は働かずに狩りや漁へ行った<sup>(17)</sup>。

しかし1960年代になると、ボストンから車で約90分のケープコッドにはリゾート施設や住居が次々と建てられ、マシュピー町に白人が多く移住してきた。1960年代後半に大規模な宅地開発がマシュピー町南部の海岸に位置するニューシベリーで始まり、先住民は森林から海岸へ自由に出入りできなくなった<sup>(18)</sup>。表1のように、1960年代から70年代にかけて、マシュピー町の白人人口は急激に増加し、マサチューセッツ州の町の中でもっとも急成長を遂げていた。

表1 マシュピーの人口（筆者作成）

	1960年以前 <sup>(19)</sup>	1960年 <sup>(20)</sup>	1970年 <sup>(21)</sup>	1976年 <sup>(22)</sup>	1977年 <sup>(23)</sup>
非白人	約350	342	306	約300	約4,000(年中)
白人	約100	535	982	約2,100	約2,000(毎週末)、約14,000(夏のみ)

1963年にマシュピー町は土地区画法によって大手開発業者であるニューシベリー社に便宜を図ったが、それとともにマシュピーの「古道」が閉鎖され、漁に行けなくなった。またマシュピーの伝統的信仰や儀式にとって重要な聖地も破壊された。「インディアンのタヴァーン (Indian's Tavern)」は2つの道の交差点で何世代もの間、小枝が堆積した山であった。マシュピーは通り過ぎる時この山に小枝を投げる伝統があり、枝を拾って唾を吐き、願い事をして山に投げた。これをしなければ悪いスピリットがついてくると信じられてきたが、この「インディアンのタヴァーン」の山も土地開発によって崩され、遺棄された<sup>(24)</sup>。族長のアール・ミルズによれば、「立入禁止」の看板によってピクニックやパウワウの場所、古い学校もなくなり、マシュピーはあたかも先祖の土地から追い出されたかのように感じた<sup>(25)</sup>。

1971年にマシュピー町はニューシベリー社の開発を禁じる新たな区画法を制定したが、同社が抗議して1974年にバーンステイブル上位裁判所で正当性を立証した。このように1971年から74年にかけて土地区画法をめぐる白人住民とマシュピーの間に緊張が高まり、白人指導者は町議会の主導権を確立しようとした<sup>(26)</sup>。1968年まで町の政治はマシュピーが中心に行っていたが、1974年には白人の議員が多く選ばれ、先住民は自治を維持できなくなった<sup>(27)</sup>。漁業期間が定められて活動が制限され、にしんの割り当てによって食料源が減少したため、マシュピーは先住民の漁業権を主張し、部族の所有地への課税に反対した<sup>(28)</sup>。1976年にボストンでの公聴会で、マサチューセッツ州インディアン問題委員会 (Massachusetts Commission on Indian Affairs) の委員であったアメリア・ビンガム (Amelia Bingham) は以下のように述べた。

我々の海岸に5万から20万ドルの家を建てる土地所有者や新参者が我々の土地に流入して、共同体の固定資産税が高くなった。町の多数の先住民は土地を所有していたが、高い税を払うことができない。税を払えないのでしばしば土地を売らなければならない<sup>(29)</sup>。

また、1970・80年代に部族の指導者であったラッセル・ピーターズは「・・・我々は政治力、経済力、全てを失った。・・・」と言った<sup>(30)</sup>。以上のように、1960年代からケープコッドやマシュピー町には白人移住者が増加し、従来のように先住民が自治や伝統文化を維持することが難しくなったのである。

このような中、アメリカ先住民の権利運動であるレッド・パワーの影響を受けて、1970年にワンパンノアグのメンバーが抗議運動の「喪の日」を開始した。アメリカン・インディアン・ムーブメント (American Indian Movement: AIM) が1968年にミネソタ州ミネアポリス市で結成され、全米各地で様々な抗議運動を行った。ニューイングランドでは1960年代に連邦東部インディアン連合 (Federated Eastern Indian League)、1970年にはニューイングランド・アメリカ・インディアン連合 (United American Indians of New England: UAINE)、1974年に AIM ニューイングランド

支部(New England Chapter of the American Indian Movement)が結成された<sup>(31)</sup>。ゲイヘッドのワムスタ・フランク・B・ジェームズ(Wamsutta Frank B. James)は、1970年にピルグリム到達350周年記念のマサチューセッツ州の祝宴でスピーチするよう依頼され、ピルグリムが彼の祖先の墓を暴いて小麦や豆の貯蔵を奪い、祖先をそれぞれ220シリングで奴隷として売ったことをスピーチで訴えようとした。350周年記念の企画者は彼らが準備したスピーチをするよう促したが、ワムスタは拒否し、プリマスでアメリカ中の先住民や支持者と共に「喪の日」を開催し、国中から約500人の先住民がプリマスに集まった。AIMの活動家も参加し、メイフラワーII号に乗船し、ユニオン・ジャックを降ろして大砲、マネキンを海に投げ入れた<sup>(32)</sup>。ワムスタは1970年の最初の「喪の日」に、プリマスのマサソイト像の前で以下のようなスピーチをした。マサソイトは当初、ピルグリムを迎え、友好を図ったワンパノアグの族長であった。

(前略) 歴史は我々に事実を教え、残虐行為があった。破られた条約があり、それらのほとんどは土地所有に関するものだった。(中略) そして長い年月が過ぎ、インディアンに奪われた土地や住むよう設置された保留地の多数の記録が残っている。力を奪われたインディアンは、白人が土地を奪って個人の財産として使用するのをただ傍観するしかなかった。(中略) 時とともに我々の文化は衰え、言語もほとんど消滅しかけたが、我々ワンパノアグはまだマサチューセッツの大地を歩いている。・・・我々の魂(スピリット)は決して死に絶えない。気高く立ち上がり、手遅れにならないうちにこれまで見逃してしまった不正のすべてを我々は正すのだ<sup>(33)</sup>。(後略)

ワンパノアグは1675-76年の対植民地戦争であるフィリップ王戦争後に滅んだと白人に信じられてきたが、ワムスタは現在も疑いなく存在していると訴えたのである。このように「喪の日」はワンパノアグの歴史的記憶に基づいて、1960年代以降のワンパノアグの土地開発と白人の流入に抗議するために始まったと考えられる。「喪の日」はその後、毎年感謝祭の日にプリマスで開かれて先住民の権利を要求してきた。1972年には警官が警察犬を連れて「喪の日」の参加者を監視し、肩の周りに国旗をかけていた若い女性ジュディー・メンデス(Judy Mendes)を攻撃して逮捕した<sup>(34)</sup>。前述のアメリア・ビンガムは、1973年にマシュピー・ワンパノアグ博物館(Mashpee Wampanoag Museum)を設立した。翌1974年に「喪の日」はピルグリム・ホール博物館に置かれていた10代のワンパノアグの少女の遺骨の返還を要求し、すぐに遺骨は返還されて丁寧に埋葬された<sup>(35)</sup>。ワンパノアグはその後も部族の通婚や家系、拡大家族ネットワークを維持してパウワウを開いた。1980年に行われた「喪の日」のスピーチで、ワンパノアグ・ネイションの高位セイチャム(sachem: 族長)のジョン・ピーターズ(John Peters)は、環境破壊に対して先住民は立ちあがらなければならないと主張した<sup>(36)</sup>。以上のように、1970年の「喪の日」は1960年代以降に部族の土地へ白人移住者が増加し、危機感を強めたワンパノアグが全米でレッ

ド・パワー運動が高まる中、開始したと考えられる。そして「喪の日」のスピーチからは、現代まで継承されてきたワンパンノアグの歴史的記憶が権利回復を求める根拠になっていたことが読み取れる。

## 2. 連邦承認と土地権

1960・70年代のアメリカで高まった先住民運動は、従来の同化主義的な連邦先住民政策に修正を促し、1975年に「インディアン自決・教育援助法」(Indian Self-Determination and Education Act)が成立して先住民部族の自治尊重へと移行した。ニューイングランドの部族は、祖先伝来の地や州に与えられた保留地に住んできたが、1970年代に連邦承認と自治を求めるようになった<sup>(37)</sup>。1972年にメイン州のペノブスコット(Penobscot)とパサマコディ(Passamaquoddy)が土地権を裁判所に訴えたが、1974年に合衆国最高裁は、州が先住民の土地を譲渡することを禁じた1790年のインディアン交易法(Indian Trade and Intercourse Act)が北東部の州に適用されると判決した。そして翌75年には連邦承認部族であるか、連邦と信託関係にあるかを問わず、部族の土地を守るためにこの法が適用されると決定した<sup>(38)</sup>。本節では、このような動きの中でワンパンノアグがどうやって土地権、連邦承認を求めたのか、またそれらは裁判所や議会でのどのように扱われたのかを考察する。

マシュピーはペノブスコットとパサマコディの裁判に注目し、1974年初頭にアメリカ・ビンガムがコロラド州のアメリカ先住民権利基金(Native American Rights Fund)の弁護士トマス・テューリーン(Thomas Tureen)に連絡をとった。メイン州の先住民の訴訟を担当したテューリーンの支援によってマシュピーは1974年2月にマシュピー部族評議会(Mashpee Wampanoag Tribal Council, Inc.)を創設し、部族の文化・経済プログラムのために連邦補助金を得て、連邦承認と部族の土地権を求めるようになった<sup>(39)</sup>。マシュピーには伝統的に部族の指導者を輩出した代表的な家系がいくつかあり、町の経済、政治を司るとともに土地権請求の中心になった。

ラッセル・ピーターズ(Russell M. 'Fast Turtle' Peters)は70年代初期に最初の部族議長を務め、連邦承認と土地権を求めた。退役軍人でハーヴァード大学修士号を取得したピーターズは、マシュピーの伝統に関する本を多く著した。ラッセル・ピーターズと彼の兄で高位メディスンマンのジョン・ピーターズ(John Peters)は一時期、小さな不動産業を営んでいた<sup>(40)</sup>。1974年にマサチューセッツ州インディアン問題委員会が創設されるとジョン・ピーターズが理事を務め、1990年のアメリカ先住民墓地保護返還法(Native American Graves Protection and Repatriation Act)のモデルとなった州法の制定を促し、また1978年のアメリカ・インディアン信教自由法(American Indian Religious Freedom Act)やインディアン児童福祉法(Indian Child Welfare Act)の制定に努めた。一方、族長のアール・ミルズは歴史家として部族の伝統を熟知し、伝統派でありながら近代的な側面を併せ持ち、町で最高のレストランを経営していた<sup>(41)</sup>。部族には伝統派

と革新派のメンバーがいて、革新派が部族評議会を「法的権力をもつ事業」とみなす一方、伝統派リーダーは部族の文化や生活様式を重視し、「伝統的なスピリチュアリティで指導力を発揮」して白人社会の抑圧を解決しようとした<sup>(42)</sup>。

部族の顧問には、テューリーンとともにアメリカ先住民権利基金の若い弁護士バリー・A・マーゴリン (Barry A. Margolin) が着任した。マーゴリンがマシュピーの土地権について膨大な歴史的記録を調査したところ、1842年と1869-70年のマサチューセッツ州議会による一方的な法律や措置によってマシュピーは土地を失ったことが判明した。従来の共有地は分割されて部族員による土地売却が可能になり、売らなかった者も税を払う義務が生じ、税金滞納の公売によって土地を失った。その結果、マシュピー・インディアン地区が町に併合された1870年以降、町の土地のほとんどは非先住民が所有するようになったのである<sup>(43)</sup>。

1975年にマシュピー・ワンパノアグ部族評議会は内務省に連邦承認を求める旨を通知した<sup>(44)</sup>。マーゴリンは評議会の指導者と土地請求について討議したところ、訴訟によってマシュピー町の白人住民との関係悪化を懸念する部族員もいた。そのため、当初は弁護士が話し合いで解決することを目指したが、マシュピーの土地請求は彼らに真剣に受け止められなかった。また白人住民の間に先住民への悪感情が生じ、マシュピー町では先住民に対するハラスメントが起きた。1976年にワンパノアグ・インディアン博物館理事のアメリア・ビンガムは議員によって解任され、数か月後に博物館は再開されたが理事は非先住民が就任した<sup>(45)</sup>。また1976年7月29日夜、17世紀の先住民村を復元した場所でキャンプをしていた8人のワンパノアグと1人の非先住民の若者が30人の警官によって逮捕された。8人の中には、族長アール・ミルズの息子のアール・ミルズ・Jr.(Earl Mills Jr.)がいたが、1976年12月27日に始まった裁判で、彼らは無罪になった<sup>(46)</sup>。さらに1976年に町の税査定者はワンパノアグの納税義務を主張して部族評議会に課税したが、後に州の上訴税委員会は部族の無税を決定した<sup>(47)</sup>。

こうした中、アメリカ建国200周年の1976年8月26日、マシュピー・ワンパノアグ部族評議会はマサチューセッツ州連邦地方裁判所にマシュピー町の4分の3に相当する約1万6千エーカーの未開拓地への権利を求める訴訟を起こした。1834年から1870年の間、マシュピーの土地が連邦政府の許可なく譲渡されたことは1790年のインディアン交易法に違反するとして、土地開発業者のニューシベリー社とマシュピー町の非先住民の土地所有者100名以上を相手取って訴えたのである。このマシュピーの訴訟によって、地元の白人住民の間には混乱が広がった。裁判でネイティブ・アメリカン権利基金の弁護士に対抗するために、マシュピー町は著名なボストンの弁護士ジェイムズ・セントクレア (James St. Clair) を雇い、全国から支持と献金を募り、多くの白人住民が州議員等に先住民の土地権を認めないように働きかけた。開発業者、レストラン、小売店、ガス・ステーション、観光業が損害を被り、町は訴訟に35万ドル以上の多大な費用を要した<sup>(48)</sup>。

マシュピーの訴訟は地元の白人住民を驚かせたため、マーゴリンは、先住民がマシュピー町

の全ての家主に立ち退きを迫っているのではないと主張した<sup>(49)</sup>。またワンパンノアグ部族議長ラッセル・ピーターズは、先住民がかつて暮らしていた頃のように土地を皆が使えて漁業や狩猟をできるようにしてほしいだけであると述べ、マシュピーが聖地に自由に入出入りする権利を求めた<sup>(50)</sup>。ジョン・ピーターズは「我々は自分たちの方法が正しいと知っている。・・・土地訴訟はこれと大いに関係がある」と述べ、「生活の中心、インディアンの文化は土地に根差しているのです、土地を求めて守らなくてはならない」とマシュピーは言った<sup>(51)</sup>。ラッセルの娘のポーラ・ピーターズ(Paula Peters)も、部族の土地を守る武器が必要なため、マシュピーは連邦承認を求めたと後に述べている<sup>(52)</sup>。このようにマシュピーは、部族のアイデンティティを保つために土地を必要とし、部族の存在をアメリカ社会で主張して連邦政府から医療、教育、住居の支援を得ようと試みた。

1934年のインディアン再組織法で部族政府の設立が促されたとき、マシュピーを含む多くの先住民コミュニティは連邦承認を求めなかった。なぜなら承認を得ると連邦政府の管理下で、様々な干渉を受けることになったからである。しかし1970年代に連邦政府が福祉予算を削減すると、医療、教育、住居の支援を得るために多くの部族が連邦承認を求めるようになった。マーゴリンは1977年6月6日、内務省弁護士レオ・M・クルリッツ(Leo M. Krulitz)に合衆国がインディアン交易法に従って土地請求の訴訟を起こすよう要求したが、内務省は応じなかった<sup>(53)</sup>。

1977年10月に連邦地方裁判所でマシュピー族対ニューシベリー社等(Mashpee Tribe v. New Seabury Corp.)の裁判が始まった<sup>(54)</sup>。1977年10月21日、首都ワシントンで開かれた、合衆国上院先住民問題選任委員会(U.S. Senate, Select Committee on Indian Affairs)の公聴会で、マサチューセッツ州上院議員のキース・ケネディ(Keith Kennedy)は、連邦地方裁判所で係争中の裁判はマシュピー町の住人に経済的困窮をもたらし、奪われた土地の補償として部族に400万ドルを提示して、先月最後に両者の間に協定を結ぼうとしたが失敗したと主張した。またもし先住民の土地権が支持されたら、合衆国は1億5千ドルから2億ドルを賠償することになり、さらに政府は他の先住民の要求を解決するために何十億ドルも補償しなければならないと警告した<sup>(55)</sup>。一方、下院議員のゲリー・スタッズ(Gerry Studds)、上院議員のエドワード・ブルーク(Edward Brooke)、エドワード・ケネディ(Edward Kennedy)も、マシュピーと白人住民の間を仲裁し、協定を促そうとした<sup>(56)</sup>。

約40日間にわたる裁判では、マシュピーが歴史的にインディアン部族として存在してきたかが争点となった。植民地時代の戦乱で、「祈りの町」マシュピーはキリスト教に改宗したワンパンノアグをはじめとする先住民の避難所となった。またワンパンノアグは白人との混血のほか、18世紀半ば以降に元ヘッセン人傭兵や捕鯨船で連れてこられたカボベルデの黒人と通婚していた。裁判では、マシュピーの指導者や住民の他、先住民に関する学者らが詳細な証言を行った。原告のマシュピー側には著名な歴史家ジェイムズ・アクステルと人類学者のキャンピシ、弁護側には歴史家ハッチンズと社会学者ジーン・ギュレミン等が証言した。キャンピシは現地調査に

基づいてマシュピーの変容と現在を説明したが、弁護側を有利にしたのが歴史家ハッチンズの証言であった。5 日間、証言台に立ち、詳細な文献史料に基づいてマシュピーが歴史的に一つのインディアン部族であったことはなく、複数の部族と他のマイノリティの混合集団であり、次第にアメリカ社会に同化していったとハッチンズは主張した<sup>(57)</sup>。

膨大な証言の後、陪審員は6つの歴史的時点でマシュピーの土地所有者が一つの先住民部族であったかどうかを決定するように求められた。すなわち、(1)1790年7月22日、最初のインディアン交易法が公布された日、(2)1834年3月31日、マシュピーが行政単位として地区の地位を得た日、(3)1842年3月3日、マシュピー地区の土地が各個人に分割された日、(4)1869年6月23日、土地割譲規制が全廃された日、(5)1870年5月28日、マシュピーが町区というマサチューセッツ州の行政単位に組み込まれた日、そして(6)1976年8月26日、現在の訴訟が開始された日である。陪審員は上記の(1)(4)(5)(6)の時点でマシュピーは部族ではなかったと評決し、その結果、1978年1月にスキナー判事は原告マシュピーの連邦承認と土地権の請求を棄却すると決定したのである<sup>(58)</sup>。

1978年の下院内務・島嶼問題委員会内のインディアン問題・公有地小委員会による連邦承認に関する公聴会で、ラッセル・ピーターズは以下のように主張した。

部族の地位が問題になった我々の裁判の第一段階で、全員が白人の陪審員は混乱し、矛盾した評決を下した。我々はかつて部族であったが、消滅してまた復活し、再び永遠に消えたことが明らかになったという。このような例から、未承認部族が存続するにはインディアン承認法(Indian recognition bill)が可決されなければならないと我々は考える。だからマシュピーは1975年7月に連邦承認を請求したのだ。(中略)評決を下した人々は先住民に関してまったく無知であり、彼らを教育しなければならないと思う<sup>(59)</sup>。

ラッセル・ピーターズは連邦承認を求めたが、「[我々は]自分たちで定義できるように部族の定義を自覚しなければならない」と述べ、血の濃さという白人の基準で部族員を決定し、自らを定義できなくなることに對して抗議した<sup>(60)</sup>。また、同じ公聴会で、ラッセルの兄のジョン・ピーターズは次のように主張した。

議会は過去に連邦政府のみでなく、マサチューセッツ州、マサチューセッツ湾植民地やプリマス植民地によって法律を制定させ、英国王の条約を可決し、先住民に権利や土地、部族承認を与える法律を制定したのだ。それが1978年に突如、もはや部族ではないとされた。これは我々にとっても深刻な問題である。なぜなら我々はこの土地にずっと暮らし、魂(スピリット)がここにあり、祖先の魂(スピリット)もこの土地に宿っているからだ。我々は変わってなどいない。ここに生きているのだ<sup>(61)</sup>。

歴史を遡ると、1665年にマシュピーの族長たちは25平方マイルの土地を部族に留保し、プリマス植民地は1685年にこれを承認した。その後、1725年にプリマス植民地はマシュピーの土地所有管理を定め、部族を土地所有者として認めた。また1746年にプリマス植民地が部族に後見人を指名したが、1760年に部族は英国王へ苦情を申し立て、王は植民地に後見人の中止を命じたのである<sup>(62)</sup>。

このように、裁判や公聴会ではマシュピーの代表的な家系の指導者や伝統派部族員がワンパノアグの歴史的記憶に基づいて証言や主張を行い、先住民を支援するマーゴリンやテューリーンのような弁護士が土地権、連邦承認の請求を支援した。マシュピーは部族の自治と伝統的文化を維持するために土地返還を求め、土地権を得るために連邦承認を必要とした。さらに部族員の住居、医療、教育を補助する連邦資金を得て、アメリカ社会にワンパノアグの歴史と現在について理解を促そうとしたのだった。しかし、1978年の二審のマシュピー族対マシュピー町の裁判では、1842-1869年の間、つまり土地が各個人に分割された時期にマシュピーが部族のアイデンティティを放棄したとされ、再び原告の訴えが棄却された。その後、マシュピーは最高裁判所に上告したが、1979年10月に上告が否認された<sup>(63)</sup>。

以上のように、裁判でマシュピーが先住民部族ではないとされた背景には、土地請求によってマシュピー町が受ける経済的・政治的影響の大きさがあったと考えられる。ボストンから車で約90分のマシュピー町は海岸に面した恰好の別荘地となり、宅地開発が進んで白人住民が多数居住し、今後も開発が期待されていた。そのため、マシュピーの土地権は白人住民や開発業者に多大な経済的損失をもたらす障害となった。実際に裁判後の1980年代、マシュピー町では中断していた住宅建設ブームが再開し、非先住民が主導する町議会は年間600件のペースで建設許可を出したのである<sup>(64)</sup>。

一方、1978年には内務省によって連邦承認の規定が公布された。マシュピーが土地請求訴訟で部族であるかを判断された基準とはやや異なっていたが、このときの連邦承認の主な基準は以下である<sup>(65)</sup>。(a)請願グループのかなりの割合が特定の地域に住み、メンバーが歴史的に特定の地域に住んでいた先住民の子孫である。(b)請願者はそのメンバーに部族の政治的影響を維持してきた。(c)メンバーを決定する基準や議事手続きが存在する。(d)メンバーのリストを所有している。(e)他の北米先住民部族員ではないメンバーで構成されている。(f)請願者が連邦政府との関係を終結していない<sup>(66)</sup>。1980年代以降もマシュピー・ワンパノアグは連邦承認と土地権を請求したが、連邦承認を得たのは2007年であり、約320エーカーの土地を保留地として取得したのは2015年になってからである。このように当初の訴えから、実に30年以上もの長い年月を要したのである。

## おわりに

以上、ワンパノアグが 1970 年代になぜ、どのように土地権と連邦承認を求めたのか、そして当時、マシュピーはどのような立場にあったのかを検討してきた。まず第一節では、1960 年代にマシュピーが歴史的に暮らしてきた土地の開発が進んで白人移住者が押し寄せ、自治や伝統文化、部族のアイデンティティを維持できなくなったことを明らかにした。マシュピーの生活は 1960 年代までに変容をたどっていたが、外部からの干渉をさほど受けずに自治と部族の文化を維持していた。しかし第二次世界大戦後の連邦、州、地方政府による経済活動によって 1960・70 年代にはマシュピー町に非先住民が多く移り住み、住居、リゾート施設を建て始めた。それとともに、町の人口の中心は白人が多く住む風光明媚な海辺近くの南部へと移り、また土地の高騰によって税金を支払うために先住民は土地を手放さざるを得なくなった。「喪の日」は、そのような中で危機感を強めたワンパノアグによって、先住民の権利運動レッド・パワーの高まりを背景に 1970 年に始まった。ピルグリムを助けたワンパノアグはフィリップ王戦争以降、多くが殺されたり、奴隷として西インド諸島へ売られたが、その後も子孫は生き残ってきたという歴史意識とともに、以後毎年プリマスで感謝祭に対抗して開かれるようになった。

第二節では、1970 年代にマシュピーが土地権と連邦承認を求めて起こした裁判の過程と結果を考察し、当時のマシュピーのリーダーシップとともに彼らが直面した困難を明らかにした。1970 年代になると、マシュピー町で白人の議員が多く選ばれ、自治を行えなくなった先住民は 1974 年に町の北部に移ってマシュピー部族評議会を創設し、連邦承認と土地権を求めた。部族を代表する指導者たちは先住民の権利を擁護する白人弁護士らの協力のもと、医療、教育、住居の連邦補助を得ようとしたが、それはワンパノアグの歴史的記憶に基づいて、アメリカ社会の中で部族を維持していく試みであった。

1960・70 年代のアメリカではレッド・パワー運動の結果、先住民の権利を守る諸法が制定された。しかし、マシュピー・ワンパノアグの訴えは地元の土地開発と経済的利益を阻むものであったため、裁判では先住民部族としての歴史が否定され、土地権と連邦承認を得られなかった。マシュピーの歴史的背景と地理的条件、そして裁判を起こした時代状況が不利に働いたと言える。1970 年代後半はアメリカ社会の保守化とともに、主流の白人からマイノリティに対するバックラッシュが起こった時期である。その後もワンパノアグは土地権と連邦承認を探求し続けたが、それが実現するのは 30 年以上を経てからであった。

## 注

- (1) ワンパンノアグにはマシュピーの他にゲイヘッド(Gay Head)、チャップクイディック(Chappaquiddick)、ナンタケット(Nantucket)、ナウセット(Nauset)、パタクセット(Patuxet)、ポカノケット(Pokanoket)、ポカセット(Pocasset)、ヘリング・ポンド(Herring Pond)、アサウオムプセット・ネマスケット(Assawompsett Nemasket)の各支族がある。
- (2) Mashpee Tribe v. Town of Mashpee, 447 F. Supp. 940(D. Mass. 1978), *aff'd sub nom.* Mashpee Tribe v. New Seabury Corp., 592 F.2d 575(1<sup>st</sup> Cir.), *cert. denied*, 444U.S. 866(1979).
- (3) Francis G. Hutchins, *Mashpee: The Story of Cape Cod's Indian Town* (Amarta Press: West Franklin, N.H, 1979).
- (4) Paul Brodeur, *Restitution: The Land Claims of the Mashpee, Passamaquoddy, and Penobscot Indians of New England* (Northeastern University Press: Boston, 1985).
- (5) ジェイムズ・クリフォード「第十二章 マシュピーにおけるアイデンティティ」、クリフォード編(太田好信他訳)『文化の窮状 二十世紀の民族誌、文学、芸術』、人文書院、2003年(James Clifford, *The Predicament of Culture: Twentieth-century Ethnography, Literature, and Art*(Harvard UP: Cambridge, Mass, 1988))、433頁。
- (6) Gerald Torres, Kathryn Milun, “Translating *Yonnonديو* by Precedent and Evidence: The Mashpee Indian Case,” *Duke Law Journal*, Vol.1990, Sep. Num.4, 630.
- (7) Jack Campisi, *The Mashpee Indians Tribe on Trial* (Syracuse University Press: Syracuse; New York, 1991).
- (8) Jo Carrillo, “Identity as Idiom: Mashpee Reconsidered,” 28 *Ind. L. Rev.*, 545(1995).
- (9) James Cedric Woods, “A Comparative Study of the Evolution of Trial Governance at Mashantucket Pequot and Mashpee Wampanoag,” (2007). *Doctoral Dissertations*. AAI3252606. [ <https://opencommons.uconn.edu/dissertations/AAI3252606>] (最終検索日：2021年4月21日)。
- (10) Erika Christine D’Andrea, “Landscapes of Belonging: White Possession and Settler Subjectivity in Mashpee, Massachusetts,” Master dissertation, 2019, p.70, [ <https://scholarworks.calstate.edu/downloads/8097ks114>] (最終検索日：2022年2月12日)。
- (11) David E. Wilkins, Heidi Kiiwetinepinesiik Stark, *American Indian Politics And The American Political System* (Rowman & Littlefield: Lanham; Boulder; New York; London, 2018), pp.158-59.
- (12) United States Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria for the Proposed Finding on the Mashpee Wampanoag Indian Tribal Council, Inc.,” p.63, [ [https://www.bia.gov/sites/default/files/dup/assets/as-ia/ofa/petition/015\\_mashpe\\_MA/015\\_pf.pdf](https://www.bia.gov/sites/default/files/dup/assets/as-ia/ofa/petition/015_mashpe_MA/015_pf.pdf)] (最終検索日：2021年10月26日)。
- (13) Woods, “A Comparative Study of the Evolution,” p.171.
- (14) Woods, “A Comparative Study of the Evolution,” pp.208, 211-12; Campisi, *The Mashpee Indians Tribe*, p.143.
- (15) ワンパンノアグ・ネイションは後に伝統派と非伝統派に分裂した。Campisi, *The Mashpee Indians*, pp.131-32, 135, 140-41; Woods, “A Comparative Study of the Evolution,” pp.167, 170; U.S. Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria,” p77; Brodeur, *Restitution*, p.36.
- (16) 伝統的な祭りで、部族員が再会を喜び、伝統的なドラム、歌、踊りを行う。
- (17) Woods, “A Comparative Study of the Evolution,” p.212; Brodeur, *Restitution*, p.30.
- (18) The Associate Press, “Timeline of events in the history of the Mashpee Wampanoag tribe,” *Boston.com*, March 4, 2007, [ [http://archive.boston.com/news/local/massachusetts/articles/2007/03/04/timeline\\_of\\_events\\_in\\_the\\_history\\_of\\_the\\_mashpee\\_wampanoag\\_tribe/](http://archive.boston.com/news/local/massachusetts/articles/2007/03/04/timeline_of_events_in_the_history_of_the_mashpee_wampanoag_tribe/)] (最終検索日：2021年11月22日)。
- (19) D’Andrea, “Landscapes of Belonging,” p.70.
- (20) Campisi, *The Mashpee Indians*, p.138.
- (21) James Clifford, *The Predicament of Culture: Twentieth-century Ethnography, Literature, and Art*, p.279. Cited in D’Andrea, “Landscapes of Belonging,” pp.71-72.
- (22) “Mashpee, Mass., Fights Suit by Indians to Recover 16,000 Acres Owned by Ancestors,” *The New York Times*, Nov. 15, 1976, [ <https://www.nytimes.com/1976/11/15/archives/mashpee-mass-fights-suit-by-indians-to-recover-16000-acres-owned-by.html>] (最終検索日：2021年11月9日)。

- (23) John Kifner, “Thanksgiving 355 Years Later: Indians Sue for Land,” *The New York Times*, Nov. 25, 1976, [https://www.nytimes.com/1976/11/25/archives/thanksgiving-355-years-later-indians-sue-for-land-thanksgiving-now.html](https://www.nytimes.com/1976/11/25/archives/thanksgiving-355-years-later-indians-sue-for-land-thanksgiving-now.html)(最終検索日：2021年11月9日).
- (24) Margaret H. Koehler, “Mashpee’s Bittersweet Birthday,” *The New York Times*, May 24, 1970, [https://www.nytimes.com/1970/05/24/archives/mashpee-bittersweet-birthday-some-help-from-residents.html](https://www.nytimes.com/1970/05/24/archives/mashpee-bittersweet-birthday-some-help-from-residents.html)(最終検索日：2021年11月9日).
- (25) “Mashpee: how the whites took over,” *The Yarmouth Register*, July 21 1977, [https://digital.olivesoftware.com/olive/apa/sturgis/default.aspx#panel=home] (最終検索日：2022年4月7日).
- (26) Hutchins, *Mashpee*, pp.163-64.
- (27) Campisi, *The Mashpee Indians*, p.139.
- (28) “Mashpee: how the whites took over”; U.S. Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria,” p.111.
- (29) U.S. Congress, “American Indian Policy Review Commission. Task Force on Terminated and Non-federally Recognized Indians. Unpublished hearings in Boston, Massachusetts,” p.78. Cited in “Final Report to the American Indian Policy Review Commission,” October, 1976, p.85, [https://archive.org/details/reporals00unit/mode/2up](https://archive.org/details/reporals00unit/mode/2up)(最終検索日：2022年5月29日).
- (30) John Kifner, “Thanksgiving 355 Years Later: Indians Sue for Land,” *The New York Times*, Nov. 25, 1976, [https://www.nytimes.com/1976/11/25/archives/thanksgiving-355-years-later-indians-sue-for-land-thanksgiving-now.html](https://www.nytimes.com/1976/11/25/archives/thanksgiving-355-years-later-indians-sue-for-land-thanksgiving-now.html)(最終検索日：2021年11月9日).
- (31) “Service for Honored Elder to be Held at the Old Indian Meeting House on November 9,” [https://mashpeewampanoagtribe-nsn.gov/november-2019-mittark-blog/2019/11/1/](https://mashpeewampanoagtribe-nsn.gov/november-2019-mittark-blog/2019/11/1/)(最終検索日：2022年6月24日).
- (32) “UAIINE,” [http://uaine.org/](http://uaine.org/)(最終検索日：2022年6月28日); Jessica Hill, “Not all Native Americans celebrate Thanksgiving. Find out why,” *Cape Cod Times*, Nov 22, 2020, [https://www.capecodtimes.com/in-depth/news/2020/11/19/national-day-mourning-1970-coles-hill-plymouth-frank-james/6187076002](https://www.capecodtimes.com/in-depth/news/2020/11/19/national-day-mourning-1970-coles-hill-plymouth-frank-james/6187076002)(最終検索日：2020年11月28日); “National Day of Mourning: A 1970 protest changed how Native Americans see Thanksgiving,” *CBCRadio*, Nov 23, 2020, [https://www.cbc.ca/radio/unreserved/mayflower-400-a-deep-dive-into-american-thanksgiving-1.5807974/national-day-of-mourning-a-1970-protest-....](https://www.cbc.ca/radio/unreserved/mayflower-400-a-deep-dive-into-american-thanksgiving-1.5807974/national-day-of-mourning-a-1970-protest-....)(最終検索日：2022年6月12日).
- (33) “The Suppressed Speech of Wamsutta(Frank B.) James,” [http://www.uaine.org/suppressed\_speech/htm](http://www.uaine.org/suppressed\_speech/htm)(最終検索日：2018年5月5日).
- (34) “October 19, 1998 Settlement,” [www.uaine.org/settlement.htm](www.uaine.org/settlement.htm)(最終検索日：2022年6月28日).
- (35) U.S. Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria,” p.87; Dan Rodricks, “A Thanksgiving for Indians to cherish,” *The Sun*, 26 Nov 1992.
- (36) Fletcher Roberts, “For 10 years, a group of Wampanoag Indians have gathered,” *Boston Globe*, 28 Nov 1980.
- (37) Dale T. White, “Indian Country in the Northeast,” 44 *Tulsa L. Rev.* 365, 370(2008), [https://digitalcommons.law.utulsa.edu/tlr/vol44/iss2/2/](https://digitalcommons.law.utulsa.edu/tlr/vol44/iss2/2/)(最終検索日：2021年5月6日); Rachael Paschal, “The Imprimatur of Recognition: American Indian Tribes and the Federal Acknowledgment Process,” 66 *Wash. L. Rev.* 209, 211(1991), [https://digitalcommons.law.uw.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=3943&context=wlr](https://digitalcommons.law.uw.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=3943&context=wlr) (最終検索日：2022年5月2日).
- (38) 澤田俊明「ペノブスコットとパサマコディ」、『講座 世界の先住民族 ファースト・ピープルの現在 7 北米』、綾部恒雄(監)、明石書店、2005年、39-40頁。Joint Tribal Council of Passamaquoddy Tribe v. Morton, 528 F.2d 370(1<sup>st</sup> Cir. 1975); Campisi, *The Mashpee Indians*, p.15; Oneida Indian Nation v. County of Oneida, 414 U.S.: 661, 94S.Ct.: 772; Joint Tribal Council of the Passamaquoddy Tribe v. Morton, 388 F.Supp. 649 affirmed 528F.2d, p.370.
- (39) White, “Indian Country,” p.370; Hutchins, *Mashpee*, pp.166-167.
- (40) “Little to Be Thankful For In Wampanoags’ Land,” *The New York Times*, Nov. 24, 1977, [https://www.nytimes.com/1977/11/24/archives/little-to-be-thankful-for-in-wampanoags-land.html](https://www.nytimes.com/1977/11/24/archives/little-to-be-thankful-for-in-wampanoags-land.html)(最終検索日：2022年6月5日).

- (41)“John Peters, 67; Medicine Man of Mashpee Wampanoag Tribe,” *Native Web*, October 29, 1997, [https://www.nativeweb.org/obituaries/turtle\_obit.html](最終検索日：2022年6月12日); “Past Leaders,” [https://mashpeewampanoagtribe-nsn.gov/past-leaders](最終検索日：2022年6月5日).
- (42) U.S. Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria,” pp.87-88.
- (43) Campisi, *The Mashpee Indians*, p.13.
- (44) James Kinsella, “The long path toward recognition,” *Cape Cod Times*, June 15, 2002. [https://www.capecodtimes.com/story/news/2002/06/15/the-long-path-toward-recognition/50972216007](最終検索日：2022年6月12日).
- (45) Campisi, *The Mashpee Indians*, p.149.
- (46) “The Mashpee Nine and the Fight Over Cape Cod Land,” New England Historical Society [https://www.newenglandhistoricalsociety.com/the-mashpee-nine-and-the-fight-over-cape-cod-land](最終検索日：2022年4月9日).
- (47) “Officials Reply To Charges,” *Barnstable Patriot*, December 02, 1976, [https://digital.olivesoftware.com/olive/apa/sturgis/default.aspx#panel=home](最終検索日：2021年12月6日); Campisi, *The Mashpee Indians*, pp.154-55.
- (48) American Friends Service Committee, “Report from Mashpee: A Study of the Impact of the Wampanoag Land Claim on the Economy of Mashpee, Massachusetts,” *American Indian Journal*, Vol. 4, No.10, Oct 1978, pp.7, 9, 12.
- (49) “Mashpee, Mass., Fights Suit by Indians to Recover 16,000 Acres Owned by Ancestors,” *The New York Times*, Nov. 15, 1976, [https://www.nytimes.com/1976/11/15/archives/mashpee-mass-fights-suit-by-indians-to-recover-16000-acres-owned-by.html](最終検索日：2021年11月9日).
- (50) “Mashpee, Mass., Fights Suit,” *The New York Times*, Nov. 15, 1976; “Indians scouting out sacred grounds,” *Barnstable Patriot*, June 28, 1979, [https://digital.olivesoftware.com/olive/apa/sturgis/default.aspx#panel=home](最終検索日：2021年12月5日).
- (51) Jim Meade, Dana Hornlg, “Mashpee: how whites took over,” *The Yarmouth Register*, July 21, 1977, [https://digital.olivesoftware.com/olive/apa/sturgis/default.aspx#panel=home](最終検索日：2021年11月11日).
- (52) “Paula Peters,” [https://reimagine-europa.eu/bio/paula-peters](最終検索日：2022年1月18日); “Tribal members anticipating change,” *The Boston Globe*, August 16, 2007, [Newspapers.com](最終検索日：2021年11月11日).
- (53) U.S. Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria,” p.6.
- (54) “Mashpee Tribe v. New Seabury Corp.,” pp.7-8, [https://www.casemine.com/judgement/us/5914c544add7b049347d2f32](最終検索日：2021年10月18日).
- (55) “Report from Mashpee,” pp.3, 7, 13, 15.
- (56) Campisi, *The Mashpee Indians*, p.17.
- (57) クリフォード、『文化の窮状』、406, 426-428 頁。
- (58) クリフォード、『文化の窮状』、428, 430-431 頁。
- (59) United States. Congress. House. Committee on Interior and Insular Affairs. Subcommittee on Indian Affairs and Public Lands. *Federal Recognition of Indian Tribes: Hearing Before the Subcommittee On Indian Affairs And Public Lands of the Committee On Interior And Insular Affairs, House of Representatives, Ninety-fifth Congress, Second Session, On H.R. 13773 And Similar Bills, Including H.R. 12996 ... August 10, 1978*. Washington: U.S. Govt. Print. Off., 1979. p.41, [https://catalog.hathitrust.org/Record/007413023](最終検索日：2021年10月7日).
- (60) Mark Edwin Miller, *Forgotten Tribes Unrecognized Indians and the Federal Acknowledgment*

*Process*(University of Nebraska Press: Lincoln; London, 2004), p.43; “Identity and Tribal Recognition: The Mashpee Community,” Harvard University [https://pluralism.org/identity-and-tribal-recognition-the-mashpee-community](https://pluralism.org/identity-and-tribal-recognition-the-mashpee-community)(最終閲覧日 : 2022 年 9 月 18 日).

<sup>(61)</sup> Miller, *Forgotten Tribes*, p.47.

<sup>(62)</sup> “The Mashpee Wampanoag are one of three surviving tribes of the original sixty-nine in the Wampanoag Nation,” [https://mashpeewampanoagtribe-nsn.gov/timeline](https://mashpeewampanoagtribe-nsn.gov/timeline)(最終検索日 : 2021 年 11 月 19 日).

<sup>(63)</sup> Campisi, *The Mashpee Indians*, pp.152-153.

<sup>(64)</sup> “The Mashpee Nine and the Fight Over Cape Cod Land.” New England Historical Society.

<sup>(65)</sup> U.S. Department of the Interior, Office of Federal Acknowledgement, “Summary under the Criteria,” p.7.

<sup>(66)</sup> “25 CFR Part 54 Procedures for Establishing that an American Indian Group Exists as an Indian Tribe 1978,” pp.201-202,

[https://www.bia.gov/sites/bia.gov/files/assets/as-ia/ofa/admindocs/25CFRPart54\_1978.pdf](https://www.bia.gov/sites/bia.gov/files/assets/as-ia/ofa/admindocs/25CFRPart54\_1978.pdf)(最終検索日 : 2021 年 12 月 23 日).